

都心の環境共生住宅

南雄三郎再生工事

建設地：東京都新宿区市ヶ谷 完成：平成7年（1995）暮れ

構造：在来木造2階建て（築70年）

敷地面積：195、延床面積：114

設計：南雄三&伊良皆盛栄 造園設計：綿半インテック（株）

施工：（株）こもだ建総 造園工事：綿半インテック（株）

大正時代に建てられた築70年の古住宅。あばら家と
いった方がよい。それでも南面に縁側をもつこの家が
気に入っていた。この縁側を温室にすれば日本型パッシブ
ソーラー住宅ができると思いついた時から再生計画が始
まった。

再生後。建屋は外断熱と木製窓で高断熱・高気密化さ
れ、壁には珪藻土を用いた。手前右下に見える事務所の
屋根には草が、左下のガレージの屋根には太陽光発電パ
ネルがのっている。そしてたった20坪の庭だが、虫が
飛ぶビオトープの庭。

この座敷が気に入っていた。庭がみえるし、風が吹き抜
けるし、たった八畳なのに広く見える。誰がきても自分
の家のように懐かしんでくれる。そんな懐の大きさが伝
統的日本家屋の魅力である。

再生後の座敷 古い材と新しい材とが混在している。
縁側から冬の日が入り込み、日中は20℃を超えてしま
う。この熱を高断熱・高気密が逃がさず、朝15～1
6℃で起きる事ができるため、家全体の暖房は太陽熱で
賄うことができる。5日間曇りが続いた時でも12℃を
きることはなかった。



旧壁は真壁造で、柱は真っ黒だったが、中身はしっかりしていたが筋交いは全く利いていない。土壁を残しながら高断熱・高気密化することにした。



筋交いの役目を果たす下地材と硬質発泡ウレタンを複合したボードを外張りすることによって、容易に耐震化と高断熱・高気密化することができる。



吹き抜け上部 夏の二階上部の熱気はルーフウィンドから抜く。吹き抜け上部のエアコンから冷気が左右の部屋に入り、溢れた分が吹き抜けから一階に落ちて、この一台で言え全体を冷房する



二階の縁側 二階も縁側が廊下して使われるので、たった6畳に娘二人を押し込んでも、ちっとも狭く感じることがない。冬はたっぷり日射が入って、床もポカポカ。

開けたり閉めたり（家の中）

日本の伝統工法である木造軸組み造の魅力は、何といても建具の織り成す開けたり閉めたりデザイン。障子を閉めれば個になり、開ければ無となる。そして、縁側は内とも外ともいえぬ「曖昧」な空間をつくる。そして、木造軸組みが障子や襖のレールや戸当たりにもなっていて、それらは有機的に結び付いて全く無駄がない。



開けたり閉めたり（外）

この開と閉のデザインは外部にも実践され、扉までが開閉される。外と内の曖昧な空間をつくる格子とともに、町と個人とが共生する空間を模索した。この格子の間から夏には蛍の青い光を見つけることができる。



事務所の屋根に芝桜を植えてみた。常緑で、7センチ位しか伸びず、しかも春には花をつける。期待通り4月下旬に満開になったが、それより嬉しかったのは、夏に全く、日射の影響を受けない涼しさだった。

蛍が生息するビオトープ庭。池と川をつくり、雨水を溜めながら、ポンプで循環している。四月に蛍の幼虫を川に放し、蛍の成長を待ったが、夏には期待通り蛍が貴重な光を放ってくれた。冬には鳥が沢山きてくれる。



透水性舗装。風砕スラグを骨材にしたもので、保水しながら透水する。



生ゴミ処理機。バクテリア分解処理で、約三か月で有機肥料ができる。



雨水貯溜タンク。100リットルの雨水を溜められる。